

読字指導法開発のための漢字の読みの仮説モデルの検証

関あゆみ（鳥取大学 地域学部 准教授）

漢字の読みに関する言語心理学的研究は多いが、有効な指導法についての検討はあまり行われていない。実際の教育現場では、学年毎の配当漢字が定められているものの新出漢字は国語科の教材に応じて導入され、系統だった指導が行われるわけではない。本研究は、個人の認知能力や言語背景に応じた系統的な漢字の読みの指導法を検討するために、基盤となり得る漢字の読みに関する仮説モデルを作成することを目的とした。

健全成人を対象とする調査では漢字の読みに親密度、一貫性、音訓などの属性が影響することが知られている (Wydell, 1998, Fushimi, 1999 近藤, 1999)。また、漢字の読字能力の個人差に関わる認知能力としては語彙力 (Uno, 2009) や視覚記銘力 (Koyama, 2008)、視知覚・視覚認知能力 (後藤, 2010) などが知られているが、これらの認知能力が漢字のどのような属性に関与するのかが明らかにされていない。そこで、読みの二重経路モデル (Coltheart, 2001) を基盤として、属性の異なる漢字の読み能力と背景となる認知能力の関連を示した「漢字の読みの仮説モデル」(図) を作成した。大学生を対象として漢字音読能力と各認知能力を調べ、共分散構造分析を用いてこのモデルの妥当性を検証した (研究①)。この結果、低親密度語の読みに語彙能力がもっとも影響すること、潜在学習能力は非語の読みに影響しており、非語の読み能力を介して低親密度語の読みに影響を与えていることが明らかとなった。

また、仮説モデルの検討を実際の指導法開発へとつなげるためには、漢字の読みの仮説モデルが言語背景や基礎的能力の異なる被験者についても当てはまるのかを検討する必要がある。小児を被験者とすることは実施上の制約が大きいので、母語の異なる留学生を対象として、認知能力、語彙力と漢字の読み能力との関連を検討した (研究②)。この結果、大学生に比べて語彙力の低い留学生では高親密度語の読みでも非語彙経路に依存していること、低一貫性単語の正答率に比べて高中一貫性非語の正答率は良好であり、非語彙経路に依存する読み能力は比較的良好なことが示唆された。

研究①②のいずれでも視覚認知能力・視覚記銘力の漢字の読みへの影響は明らかではなく、研究②では語彙力の影響がきわめて大きく他の認知能力の影響が明らかとならなかった。今回の研究は大学生および留学生を被験者としたため、視覚認知能力・視覚記銘力や潜在学習能力については比較的高い力を持っており、被験者内のばらつきが小さかった可能性がある。今後は、小児や読字障害児、初級～中級の日本語学習者や外国人子女を対象を広げて検討を行う予定である。

さらに読字・認知検査に参加した研究協力者の中から機能的 MRI の被験者を募集し、漢字の読み課題を用いた機能的 MRI を実施した (研究③)。機能的 MRI を用いて親密度・一貫性のそれぞれに関わる神経基盤を明らかにすることで、低親密度語と低一貫性語が異なる経路で処理されるというモデル作成上の前提を確認することを目的とした。実験課題の課題成績からは 2 つの要因が分離できていることがうかがわれたが、関連する神経基盤については共通部位が主体であった。非特異的な難易度に関連する作業記憶や注意に関連する活動部位との区別のため、さらなる検討を行う必要がある。機能的 MRI の結果に基づく脳機能上の制約を考慮してモデルを精練することで、より実際的なモデルが作成できると考える。

今回の一連の研究をとおして、漢字の読みに語彙経路と非語彙経路の 2 つが関与し、親密度の高い語は語彙経路、親密度の低い語は非語彙経路が主体となること、このことは母語話者であっても第二言語学習者でも当てはまることが示唆された。語彙経路の読み能力は語彙力によって影響を受け、個人差がでやすいが、潜在学習能力が関与することが示唆された非語彙経路の読み能力は、比較的個人差が小さいと思われる。今後、対象者を広げて確認していく必要があるが、この仮説モデルを念頭に漢字の読み能力の評価を行うことで、個人の認知能力や言語背景に応じた漢字の読みの指導法が可能となるとと思われる。

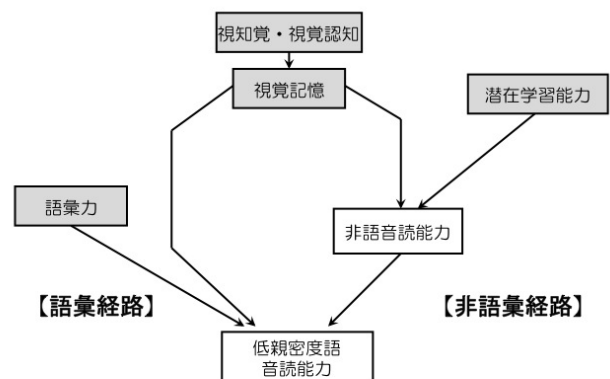


図. 漢字の読みの仮説モデル